

國學院大學學術情報リポジトリ

明治前期における好古家の実相：
松浦武四郎と柏木貨一郎の土偶人の周旋をめぐるって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内川, 隆志, 宇野, 淳子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001709

明治前期における好古家の実相

—松浦武四郎と柏木貨一郎の土偶人の周旋をめぐる—

内川 隆志・宇野 淳子

一、はじめに

「北海道の名付け親」として知られる松浦武四郎(一八一八—一八八八)は、文化一五(一八一八)年二月六日、紀州藩領の伊勢国一志郡雲出川南岸須川村(現三重県松阪市小野江)に紀州藩郷士松浦桂介時春の末子として生まれた。名は弘、幼名は竹四郎、一三歳から津藩の儒者である平松樂斎(一七九二—一八五二)の私塾で学び一六歳で江戸に家出した後、一七歳から二六歳に至る一〇年を諸国放浪に費やした。長崎でロシアの南下を耳にして以来、その眼差しは蝦夷地に注がれ、弘化元(一八四四)年より彼の地を目指し、翌年その志を果たしたのである。その後私人として三回、幕府雇いとして三回の蝦夷地調査を敢行し、嘉永三(一八五〇)年の『初航蝦夷日誌』全一二冊を皮切りに蝦夷地を紹介する多数の紀行類を出版^①、名実共に武四郎の名は広く世に知られたのである。中でも安政五(一八五九)年に刊行さ

れた『東西蝦夷山川地理取調図』二八巻は、二七九名に及ぶアイヌの協力を得て、蝦夷地の内陸までくまなく踏査した地勢図で、後の北海道の国郡名選定に反映されるなど、その価値は高く評価されている。明治二(一八六九)年には政府から正式に蝦夷開拓御用掛、開拓判官の命を受け開拓大主典の要職に就くも、翌明治三(一八七〇)年には、利権を手放さない松前藩への不満と場所請負制度の色濃く残った開拓使内部の腐敗を理由に職を辞した。後の人生は明治四(一八七一)年の大学南校物産会に北海道産の化石や考古遺物を出品するなど少年期より興味を注いできた古物蒐集^③に没頭し、数多の好古家達との交流をもつて蒐集と研究に明け暮れたのである。『撥雲餘興』首巻(明治十年刊行)、『撥雲餘興』二集(明治十五年刊行)の二著は、その集大成と言える。

北方探検家としての松浦武四郎研究は、これまでに膨大な研究が知られるものの、近代における古物蒐集という観点で「好古家松浦武四郎」に焦点をあてたものは少なく、一部その片鱗を紹介するものとして、ヘンリー・スミスによる武四郎の書齋「一疊敷」の研究^④が知られる。また、平成一六(二〇〇四)年北海道開拓記念館で開催された「松浦武四郎 時代と人びと」展^⑤、平成二〇(二〇〇八)年に、松浦家から寄贈された重要文化財指定物件の展示が松浦武四郎記念館で恒常化して以降、俄然注目されてきた部分でもある。近年では、根岸武香との関係書簡類を分析した三浦泰之の研究^⑥や松浦の蒐集品を分析した山本命の研究^⑦などが主なものである。

柏木貨一郎(一八四一―一八九八 幼名辨吉、諱は政矩、号は探古齋)は、日本建築家として、また明治五(一八七二)年の壬申検査に随行するなど、町田久成(一八三八―一八九七)らと共に明治初期の博物館行政に従事した人物として知られる。明治一〇(一八七七)年に松浦の著した『撥雲餘興』首巻の作図者の一人であり、松浦と共に同時代を代表する好古家として、国宝「源氏物語絵巻」の旧蔵者としても有名である。柏木に関する先行研究は、主に建築史学の立場から論じた大川三雄の論考^⑧や益田孝(一八四八―一九三八)との関係を論じた鈴木邦夫の考察^⑨、さらに益田と柏木

の関係を精査した山口昌男の研究などが代表的なものとなっている。¹⁰⁾

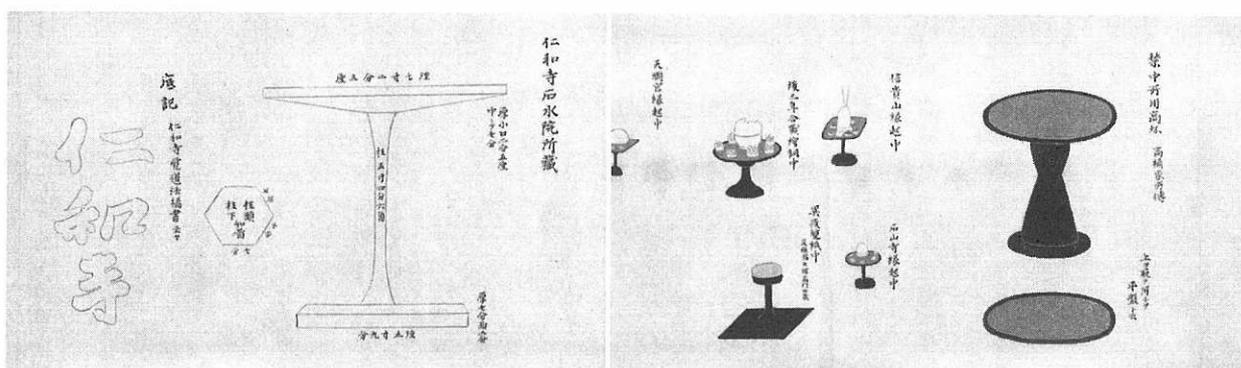
本稿は、内川隆志が研究代表者として助成をうけている科学研究費補助金基盤(C)(課題番号：二二六〇一〇〇九、研究課題名「博物館における人文資料形成史の研究 静嘉堂文庫所蔵松浦武四郎旧蔵資料の研究と公開」、研究機関… 國學院大學)の成果の一部として、松浦武四郎と柏木貨一郎の古物を巡る交流の一端について作業協力者の宇野淳子と共に明らかにするものである。特に宇野は、本文中、武蔵の好古家根岸家関連文書調査に関して、史料蒐集と分析を担当している。

二、松浦武四郎と柏木貨一郎のかかわり

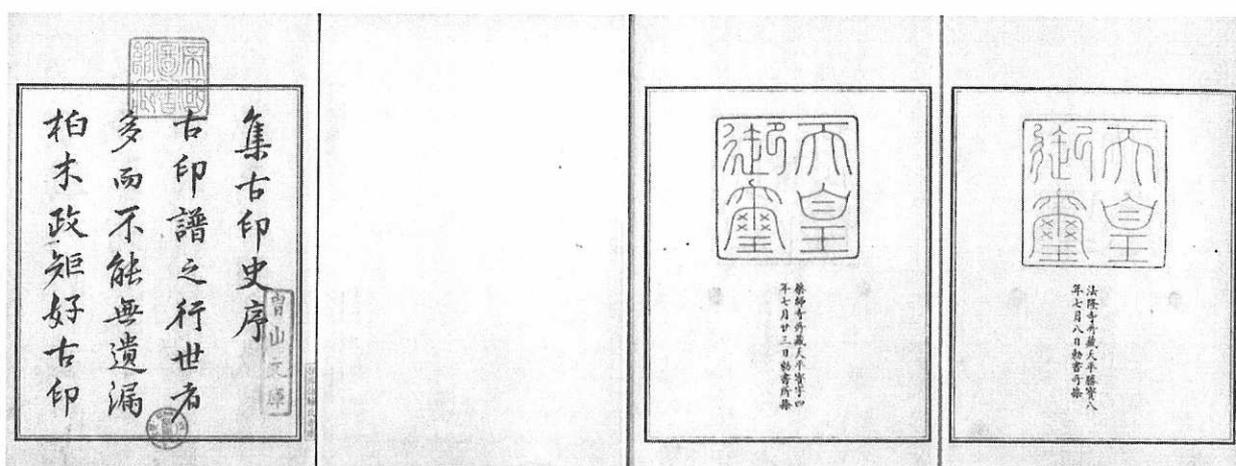
(一) 松浦と柏木の物産会・博覧会への出品

文化五年(一八一八)生まれの松浦と天保一二(一八四二)年生まれの柏木との年齢差は二三歳であり、松浦は柏木の誕生年には、九州の漂泊途上大病を患って土地の人情に触れ、長崎平戸の宝曲寺の住職となっていた。柏木の古物への興味がいつ頃に遡るのかは判然としないが、慶応二(一八六六)年に著した『高坏考』『集古印史』(図1)などの完成度から推定しても二五歳にして確かな観察眼と考証力、作図の技量を有していたことが理解できる。

二人の名前が文献に併記される初出は、明治四(一八七二)年に招魂社境内の兵部省管轄の建物で開催された大学南校主催の物産会の出品目録である。¹¹⁾これによると松浦は、松浦弘の名で鑛物門化石之部に「一 石螺 北海道浦川産 鸚鵡螺一種巨大者 右松浦弘出品」、古物之部に「一 雷斧砥 一 雷斧砥 一 未成雷斧 右三品北海道於箱詰 所掘出ニシテ松浦弘彼地遊歴ノ時之ヲ得タリ砥ハ其石質灰色形楕円ニシテ長サ一尺五寸幅一尺一寸厚サ三寸半其面ニ



(1)仁和寺石水院所藏 高坏実測図 (2)禁中所用高坏・信貴山縁起中・石山寺縁起中高坏他
『高坏考』柏木政矩 慶応2 (1866)年稿 1軸26cm、注記:自筆彩色、印記:游戲三昧院、和装 (国立国会図書館蔵)



(3)『集古印史』柏木政矩 慶応2 (1866)年刊 1冊28cm、注記、青山文庫、和装 (国立国会図書館蔵)



(4)女髪型形容之図
『女髪考』柏木政矩 年代不詳 1軸26cm、注記自筆、印記:游戲三昧院、和装 (国立国会図書館蔵)

縦ニ長ク凹ナル筋四条アリ是天然ニ非ス物ヲ研磨セシ痕ナリ鋸ハ薄キ平扁ナル石片ニシテ其一端ニ物ヲ研り截ルノ用トナセシト想ハル、痕アリ雷斧ノ未ダ全成セザル者ト彼是参考シテ此石ハ皆雷斧ヲ造ルニ用シコトヲ証ス 一 石斧
 モンベツ石ニテ造ル者 右松浦弘出品」とある。柏木は、同じく鑛物門化石之部に「一 魚齒化石 右柏木政矩出品」、古物之部に「一 勾玉雷斧石斧石釵類九十六品 右柏木政矩出品」とある。関西大学博物館には、この時の出品物四九点を柏木自らが図化した『石器寫図』が寄託資料として収蔵されていると共に、その内一七点の石器が同館所蔵の本山彦一資料の中に含まれていることが明らかにされている。¹² また、物産会出品目録には、彼らの他に主催者側の町田久成（一八三八―一八九七）、田中芳男（一八三八―一九一六）や町田の片腕として活躍した蜷川式胤（一八三五―一八八二）など、当時を代表する数多の好古家達が名を連ねていることが理解できる。¹³ 蜷川は、古物之部に「雷斧二品」など三六点到及ぶ品を出しており、これらの一部は松浦、柏木とも交流のあつた根岸友山（一八一〇―一八九〇）が蜷川に譲渡したものであることが指摘されている。¹⁴ 松浦と柏木は、福田敬業（鳴鶯）（一八一七―一八九四）、長井十足（一八三一―一八九二）、永井休三、樋口光義、市川得庵（一八三四―一九二〇）、板橋貴雄らと共に同年一〇月一日より湯島大成殿で開催予定の博覧会（経済的理由で中止）の幹事を申し付けられている。翌明治五年の文部省博覧会出品目録草稿¹⁵には、松浦の出陳品として「一 未成雷斧 一箇 一 雷斧鋸 一箇 一 雷斧砥 右三品北海道所掘出 一箇 右 松浦弘」一 古銭廿八品 右 松浦武四郎」一 咸豊重寶 九品 右 松浦弘」が記され、柏木は、「一 雷斧 二ツ連者（朱文）雷斧ノ造り懸ケニテ 一箇 一 雷斧鋸 右 柏木政矩」一 播磨國極楽寺瓦経并願文 三枚 右 柏木政矩」とある。さらに明治六（一八七三）年の文部省博覧会の松浦の出陳品として「一 古瓦 六 松浦武四郎」一 興福寺瓦硯 一面 同、柏木は、「一 古代櫛 八枚 柏木政矩」一 播磨極楽寺経瓦 二 柏木政矩¹⁶」とあり、二人が名を連ねて博覧会に出品するのはこの三回のみである。

(二)松浦・柏木・根岸① 土偶人周旋に係る研究史の確認

古物をめぐる二人の交流は、武蔵の好古家根岸武香(一八三九―一九〇二)との関連で明らかにできる。根岸武香は、先に蜷川式胤との関係で記した根岸友山の次男として武蔵国大里郡胄山村(現 埼玉県熊谷市胄山)の素封家に生まれた。家督相続の後、維新後は大宮県大総代名主を皮切りに浦和県第十四区戸長などを務め、明治一二(一八七九)年に埼玉県会議員となり、明治二七(一八九四)年には貴族院議員に選出されるなど中央政界で活躍する一方、明治一〇(一八八七)年に吉見町の黒岩横穴群を発掘し、一六基の横穴墓を開口させるなど好古家としても特筆すべき業績を残した人物である。¹⁷ 明治一五(一八八二)年にはE. S. モース(一八三八―一九二五)が同家を訪れるなど中央の人脈にも太いものがあつた。自宅には「蒐古社」¹⁸と称する「古器物陳列室」を開設するなど、考古学への熱意は並々ならぬもので、明治一九(一八八六)年に東京人類学会に入会してからは、本格的にその世界に傾倒した。

松浦との交流は武香が所持する「土偶人」の周旋をめぐって幾つかの文書が知られている。埼玉県立文書館に寄託されている根岸家文書¹⁹には、二人が交わした五通の書簡が含まれており、三浦泰之によって翻刻されている。²⁰ 明治八年と推定されている松浦が武香に宛てた書簡四点は、武香が熱中していた「古金銀」の斡旋をめぐる話題が中心となっているが、各所に武香の所有する「土偶人」に関する記載が見受けられる。明治八(一八八五)年二月八日付の書簡(根岸家文書四六四七〔古金銀外売買二付書状〕)には、

土偶人所持人有之候由、是者何卒拙者へ御周旋願上度、何卒御聞濟被下候、とにかく向の申直段二而一寸御かり受御遣し願候、大てゐの事
 ならば頂戴仕候、凡何程二申、私共直段相附御取入二成候後、外へ御

遺しニ相成候様の事ニ而者困り申候間、申上兼候、柏木者最早一ツ

所持仕候事故、一ツは私へ御周旋願上度、代料者随分きはり申候、呉々

も早々御買受御廻し方願上候、先者早々謹言、

十二月八日

松浦武四郎

根岸武香様

とあり、冒頭に「土偶人」の周旋を懇願し、最後に既に柏木(柏木貨一郎)が一つ所持しているので一つは私(松浦)へと念押ししている。このように「土偶人」を周旋する書状は、同年十二月二三日付(根岸家文書四六五一〔古金銀外売買ニ付書状〕)、同一二月二一日付(根岸家文書四六四三〔古金銀外売買ニ付書状〕)、など計四通に及び、必ず引き合いに柏木を出しては対抗意識を表出していることが理解できる。実際、柏木は武香から前年に直接「土偶人」を譲り受けていた事実と、さらに重ねて周旋を依頼する同年十二月二一日付けの以下の書簡⁽²¹⁾も知られている。

土偶人云々御報知被下有かたく奉存候、右價は首手

足共全躰の物にて少も損じ無之候は、五圓より六七圓

位のものは可有之と存候もし先年尊家より相願候土偶

の如く手足等損失致候は、二圓位の物歟小生藏品の物

より損甚しくは一圓位より一圓二分位と存候其位にて

持主賣拂は、小生え御周旋被下度奉存候男女共一對に

相成候は、別而面白く且其品も尊く相成候但し右金高

の外假箱並運送入費は差出可申候（凡二百疋位歟）

この書状篤より可申上の所金位云々の論と且當月六日シイボルトと申外國人古物會を催し候事に付周旋仕其ゆへ大延引之段奉恐入候右會の廣告並に其節獨逸人の出品にてボルネヲ島の土人今日相用候雷斧石の圖二葉奉差上候御一笑可被下候當日出品は盛なる事に而名品も夥しく出申候餘者後便奉申上候。早々頓首

十二月十一日

柏木貨一郎拜

根岸武香様

これらの書簡（松浦二月八日付・柏木二月二日付）には、オーストリア・ハンガリー帝国日本公使館通訳として来日していたハイシリツヒ・フォン・シーボルト（一八五二—一九〇八）が開催した古物展覽会についても言及し、松浦の書状には、柏木の他に樋口（樋口光義か）、福田（福田鳴鷺）、蜷川（蜷川式胤）等の参加者と盛会の様子が記されている。また、一二月二日付の書状には、松浦自身が毎月二日に開催していた「尚古会」の話題も記され、柏木、福田（福田鳴鷺）、蜷川（蜷川式胤）、横山（横山由清）の名が見える。

さて、件の「土偶人」周旋の顛末については、明治九（一八八六）年八月二日付の武香宛ての書簡（根岸家文書五〇五七「渴水より雨・嵐・古金銀の値段、当方の古物追々流行外二付書状」）に、

当方古物追々流行、其後土偶人一ツも出不申候、小生之品を大二浦山敷思ひ候由、是者当府第一等の土偶人と申事ニ御座候

とあるように、武香より贈られた「土偶人」に満足する様子が記されている。『明治九年 千秋日誌』（埼玉県立文書館收藏林家文書七五三七）には、

十六日曇 松浦へ土偶人ヲ贈ル 男首（附欠）同左腕三、同右腕三、女首（鬚付）一、同左右腕二、壺三、同大一

（總テ目方二ノ八百匁）松山ヨリ川越船へ積ル、ヒ刀、鍔ハ道義持参ノコトとあり、明治九年一月一六日に実際に武香が「土偶人」を贈った日付が記録されている。

（三）松浦・柏木・根岸② 土偶人周旋に係る新出史料の分析

静嘉堂文庫の松浦資料には「ヒ刀鍔ハ道義持参之事」と記された刀子と鉄鍔そのものが武香の書簡と共に収蔵されている（図2）。包紙には「大谷村字塚山ニテ掘出ス短刀鉄鍔 松浦先生根岸武香 明治九年一月七日」と記され、図入りの書状には「明治九年一月三日本区比企郡大谷村字塚山ヲ掘テ出ル所ノ土偶人ノ図」として、二体の人物埴輪が描かれている。埴輪の説明として、「耳ハ落テ環ノミ残ル」、「腰ヨリ下欠タリ」おそらく人物埴輪の円筒部と考えられる絵には、「如图無底ノ壺アリ」と書かれており、もう一体の人物埴輪の説明書きとして、「手ノ中ニ如此緒ニテ結ヘル形チ有リ」、「木ノ根ニテ体ハ微塵ニ毀チタリ」とある。さらに、

右は予テ去月奉申上候通り区内大谷村土偶人ヲ掘セシ地ニ一月二日人足五六人

引卒土ヲ掘リ候得共何分不見当猶三日ニ塚ノ廻ヲ掘候処三四軀掘出シ候得共

何レモ木ノ根ニテ破リ（木ノ根始ハサシコミシ細根モ年々ニフトリ 大根ト成ルニ随ヒ終陶器ヲ破候也）全体

ハ一軀モナシ漸ク前図ノ如キ

首モ胴モ手モ離レノ品ニ軀見出シ候尤頭ノ様子余ホト奇品ニ御坐候此段不取敢

申上候右御送り可申哉御問合申上候凡土偶人ニハ全体ハ有之間敷ト奉存候矢ノ根小刀ナド

掘出シ申候猶又来月頃ハ堀度候得共当ノ無キ仕事へ魚ヲ釣ル如クニテ人足ハ多分ニ掛リ

容易ニハ掛リ兼候呵々

一月七日夜認

根岸武香

松浦君

と記され、松浦に贈る九日前の一月三日に掘出した「土偶人」の速報を伝えているのである。⁽²³⁾『明治九年 千秋日誌』
 一月八日条には、「松浦へ書状ヲ出ス」とあることから書簡は、この時のものと考えられる。したがって、ここに記された「土偶人」と短刀・鉄鏃は、武香が『明治九年 千秋日誌』に記されたとおり、一月一六日に松浦に贈ったものであり、「匕刀鍔鏃ハ道義持参之事」とあるように恐らく別便で届けられたのであろう。

鉄鏃は、長頸片箭式の鉄鏃で、頸部下が欠失し、頸上部で二つに折れている。残存長は、一一・七cmで、鏃身部分の長さは、一・一cm、幅は一・〇cmと非常に小形である。頸部の断面は正方形で、厚さは〇・五cmである。重量は一〇・〇gである。鏃身の形状とサイズから、TK二一七段階後半期に位置づけることができ、七世紀中頃の製作と考えられる。刀子は、切先で二つに折れ、さらに先端部は欠失しているため全長は不明である。残存長は、一八・七cmで、幅は一・七cm、茎部の長さは二・六cm、幅は一・一cmである。刃部の断面は細三角形で背の幅は〇・六cmで、重量は四三・七gである。形態的な特徴としては、全長、刀身長が長いことに比して、茎長が極めて短いことが挙げられる。共伴遺物である鏃の年代から、TK二一七段階前後と比定しておく。

明治一〇(一八八七)年刊行の『撥雲余興』首巻には、「武州比企郡大谷村掘出埴輪物」として河鍋暁斎(一八三一-

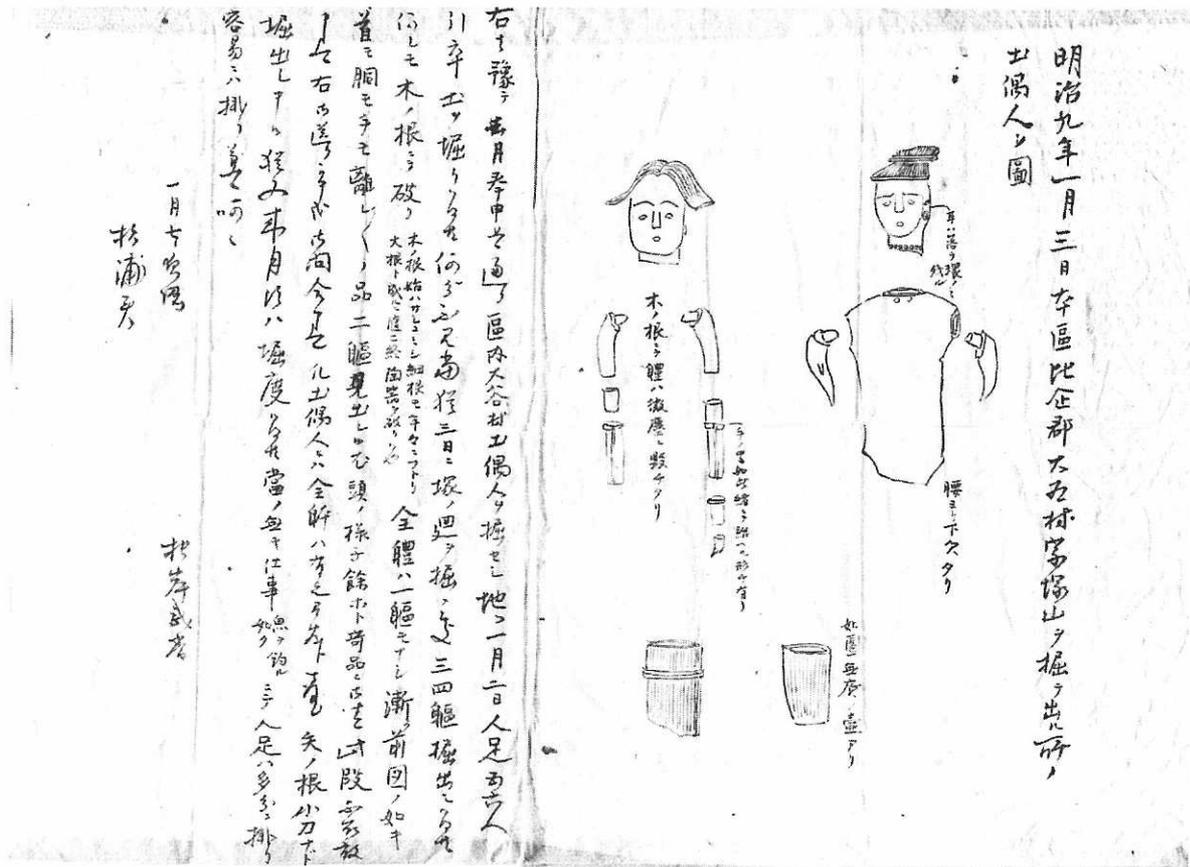


図2 「大谷村字塚山ニテ掘出ス短刀鉄鍬 松浦先生 根岸先生 根岸武香」(明治9年1月7日付)書簡 静嘉堂文庫所蔵

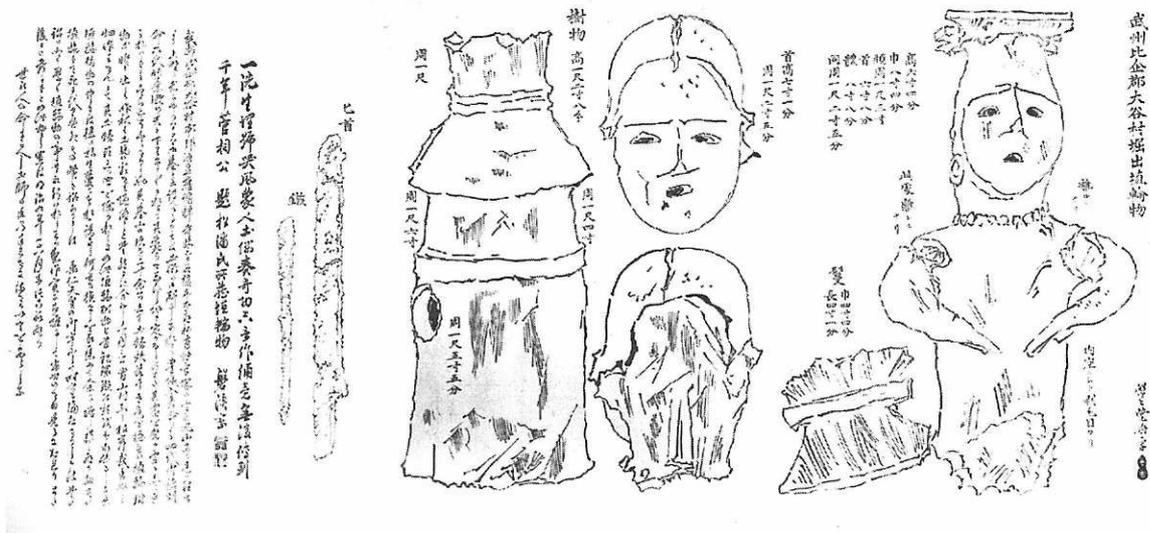


図3 『撥雲餘興』首巻「武州比企郡大谷村掘出埴輪物」河鍋暁斎画 大槻盤溪題詞

一八八九)の挿図と大槻盤溪(一八〇一—一八七八)による漢文の題詞が掲載されている(図3)。

是は往古より上野の君にゆかり有御墓と云伝へけるが、そは土俗の口碑にしあれども、豊城入彦命より四代御諸別命、六代竹葉瀬の天も下りまし／＼けれども其墓らせ玉ひし地も定かならず、また其霊を祭る処もしられざれば、もしこら辺りならざりしや其墓山の頂(き)を二十余間

去て土饅頭若干有、是を掘れば埴輪、樹物等時々出しか、去秋は土馬の類をも掘得しとぞ。然るに今とし一月三日、冑山村なる根岸武香ぬし畑作りせんとて、其土饅頭三ツ四ツを除かれしに

如此埴輪、樹物七首、銀環、鏃の類をほり出せしに、その埴輪、樹物の中には榎の根生蔓(り)て、それが為に何れも損せしを取集めて余に贈られしなり。扱その埴輪もて死に代ゆべきその賢き詔ありしは、垂仁天皇の御字にして時世も隔たざりしかば、その詔の如く厚く埴輪物の事共取

行はれしをば製作実に古雅にして当世のさま見るにたれり。また後々の考にもと如此物し置は明治九年子八月末つころなり

世の人の命にかへし土師の臣の手わざにまさるいさをあらじな

とその来歴と「土偶人」への思い入れが記される。²⁴⁾

(四)『撥雲餘興』にみる柏木の図解

『撥雲餘興』首卷には、柏木の描いた図解が数点知られる(図4)。このうち(1)・(2)に描かれた三鈴杏葉と(3)の鋏形石については、静嘉堂文庫に実物が収蔵されており、照合が可能である。

(1)は三鈴杏葉で、柏木による図の上部の解説は、

此鈴長曲一尺五寸五分、横径五寸三分、重二百四十匁

大和国十市郡なる山陵のほとりより掘せしとのミにて、こまかには伝はらず。蜷川大和守家に

蔵られしとぞ、其図のミを見ることひさしかりしが、明治九年神無月末つかたあるあき人来

りてはからずも我ものとなれることのうれしさのあまり梓にものすとて

今日よりは手馴すものとなりけり うつしゑにのミみてし此鈴

「大和国十市郡なる山陵のほとりより掘せし」とあることから、具体的な場所の特定は出来ないが、現在の奈良県明日香村、高島町周辺の古墳出土と考えられ、蜷川式胤の蔵品であったことを伝えている。

現品を収納する箱蓋表には、「皇和宝銅 第四」「古鈴」「多氣志樓 蔵」、蓋裏には、「明治九年立冬前一日 湖山樓主 長愿題籤[㊦]」と書かれている。三鈴杏葉そのものは欠損もなく完形で鑄造製品である。全長一五・九cm、幅一六・三cmで、重量は九三八gである。立間は長さ二・九cm、幅三・三cmの長方形で、厚みは〇・七cm、断面形態は隅丸の台形である。立間下部には扁円部と接して径一・一cmの円形の孔がある。板状部は、長さ七・〇cm、最大幅五・〇cmで上下の弧により形成された扁円部と下方の三角部に区分でき、三角部の断面は左右両端部が突出している。扁円部の文様は、中心に径〇・九cmの珠文をもち、その周囲は径一・四cm程度の圏線で区画されている。圏線からは各二本単位で放射状に沈線が八本伸び、扁円部を四区画している。二本の突線の間には二個の珠文が縦に配され、沈線の間には径〇・四cmの二cm程度の珠文が三点トライアングル状に配されている。三角部は中心に〇・九cmの大粒の珠文をもち、その周囲には径〇・四cm程度の珠文が大粒の珠文上方に左右二個、下方に一個施文されている。三角部の右辺端部にはキサゲ状の研磨痕跡が残っている。鈴は、板状部の左右と下に径六・四cm、六・五cm、六・三cm、高さ六・一cm、六・四cm、六・五cmの球形鈴が三個配されている。鈴口の長さは五・六cmで、鈴の肩付近まで食い込

み、幅は〇・八cmである。鈴内部には径二・八cmの丸(石)が入られる。板状部と鈴は、鈴口端部の中央部の高さで接続している。

(2)に描かれた武州大里郡出土の三鈴杏葉の箱蓋表には、「皇和宝銅 第五」、「十字鈴」、蓋裏には、「古色可相掬古音猶存」、「明治十年第四月」、「湖山老人愿題[㊦][㊦]」とある。「長愿」、「湖山」とは、梁川星巖門下の漢詩人で安政の大獄に連座して幽閉された小野湖山(一八一四—一九一〇)である。

これには柏木の挿図に横山由清の解説と題詠が付される。⁽²⁵⁾

松浦の翁さきに十字鈴のいと大きなを得られたるハ前図にミゆ今また此鈴を得ら
れてともに愛玩せらるゝと古銭の名に牛吼求友とあることなと思ひよそへられて
ふりし世を忍ふる君か あたりとや鈴もすゝろに心よせけむ 由清

形態的には、内区が扁円部と三角部に区分され、それぞれに中心珠文をもっている。扁円部はかなり扁平で、中心珠文の周りに六点の珠文がありさらにその左に一点、右に三点の珠文を配している。三角部内には、他の珠文とあまり大きさの変わらない中心珠文と上部に二点の珠文が並置され、下部には一点が施文されている。これらの特徴から、最も類似度が高いのは群馬県上芝出土品で、Ⅲb段階に位置づけられ、その年代は六世紀前半以降と考えられる。⁽²⁶⁾

同頁の柏木の挿図には

大和國十市郡堀出石小刀の図

樺太人今用る所の小刀如此刀身長一寸七八分より二寸五六分の者有 ヲロッコ タライカ スメレンクル
人皆是に同じ蝦夷人は左小刀と云 刀身少し反りあり

と解説が付され小刀自体について

長一寸八分幅一寸厚四分五厘玉造石ヲ以テ作ル余所蔵一品、其外三品ヲ見ル。是則

樺太人所用ノ樺皮鞘ノ小刀ノ形象ナリ。刀身有ハ過有ランヲ恐レテ石ニテ作り、子供ニ提サセシ

モノカ。今蝦夷地ニテ木ニテ小刀ノ形ヲツクリ、子供ニ提サセ是ヲニイマキリト伝。ニイハ

木、マキリハ小刀ノ夷言ナリ。樺鞘ハ樺皮二三枚モ重(ネ)、図ノ如ク一方ヲ樺ノ細根モテ縫合(セ)タ

ルモノニシテ、樺太地ノ土人必ズ是ヲ用ヒ、是ニ又容ルノ刀身ハ左刃ニシテ、夷人木幣ヲ削

ルニモ本部ノ土人ハ向(フ)ニ削リ、樺太地ノ土人ハ手前ニ揆(キ)削ルナリ。同シ蝦夷人ト云トモ南北

地ノ土人ノ風俗異ル此ノ如シ。今其樺太地ノ小刀ノ形内地ニ遺(リ)シ事是マタ奇ト云ンカ。近此武

州大里郡所掘得土偶人、前ニ此小刀ヲ提タリト。是好古家ノ一考ヲ凝サスンバ有ルベカラザル

事ナラズヤ。明治十年第一日中浣 多氣志郎記

と記し、樺太人所用の小刀と武州大里郡掘出の土偶人(人物埴輪)に裝飾された刀を比較し、考証している点が興味深い。

(3)の鋏形石については、

鋏石 (長六寸九分上幅二寸二分下幅四寸三分穿ノ処厚八分ヨリ九分ヨ)

と記し、これも柏木によって挿図が描かれる。解説は、

是は伊勢の津なる岡氏(伝右エ門)、大和国三輪山にて掘得られしとてもたらして、此人うせて

後、石水翁(川喜多太夫)して乞得たるなり、雲根志には狐の鋏石とあるは其かたち鋏に似たる故

に号(け)られたるか、さるははやう難波なる兼葭堂も近江なる石亭の蔵せられしとぞ、これと

三枚をみたるのみにておほく世にもつたはらじとおもふをもて、かくはものするなり、また

添て図したるはおなじ所にて掘得しとて、其あたりなる人にて三輪玉といひつたふるとよ。

こも考証のはしにもとてならひ図するなり

そのかみのことはしらねど今の世に得がたき鍬の石とこそみれ

と記され、入手した経緯が記される。木内石亭『雲根志』や木村兼葭堂を引き合いに、如何に稀覯な品であるかを強調している。

箱は桐の板目を素材とした簡素な印籠造で、蓋表右上には「馬角第八」と青紙の題箋、右下隅に朱印を押印した紙が張られ、蓋裏にも題箋に「第八」と墨書されたものが貼られている。箱書きなどの付随情報は無い。鍬形石は錦で仕立てられた組紐付きの袋に収納されており、松浦の愛着が感じられる。

鍬形石は、古墳時代の碧玉製腕飾の一種である。平面形がほぼ卵形になる環状を中にして、一端を長方形に近い板状につくり、他端を幅が広くて厚い笠状とし、環状と板状の接点の片方に突出のある扁平な腕飾である。このような形状から鍬を連想しその名称が江戸時代に生まれ、今も踏襲される。その祖型は大型巻貝であるゴホウラを縦割りにした弥生時代の貝輪である。古墳時際前期中葉から中期前葉の古墳の副葬品として近畿中央部を中心に北部九州、東海にかけて出土する。奈良県東大寺山(二七点)、同県橿山(二三点)、同県島の山古墳(二一点)の多量副葬の例も知られている。²⁷⁾ 形式的にはI型からIV型に分類され、松浦資料はⅢ型に属し、上部に山刻突帯突起が付され、内孔下端部に突起が付く。出土地は大和国三輪山と伝承されているが、巢山古墳出土の可能性が高い。²⁸⁾ その詳細は不明である。石材は、木目状紋理のある緑色凝灰岩が用いられ、突起とその上方付近に朱の痕跡が認められる。法量は最大長二〇・九cm、最大幅一二・九cm、最大厚二・三五cm、重量は五六三gを計る。

(五) 土偶人周旋以降の松浦と柏木

このように二人の古物を介しての交流は、明治四年頃から明治一〇年頃まで続いたが、それ以降については交友を示す積極的な史料は見当たらず、明治一五(一八八二)年に刊行された『撥雲餘興』二集には、柏木の挿図や解説も認められないのである。山口昌男も指摘しているが、大正二(一九一三)年の『集古』「會員談叢」に福田寒林上人談として以下の一文が掲載されている。⁽³⁰⁾

柏木貨一郎といふ人は中々人の物は感心しない人で何を持って行つてもキットけなすので皆んな一番其鼻を折つてやらうと思はないものはなかつたが或時あんまり青瑯玕の講釋を聞かされて癢に障はつたから其次行くとき硝子切を懐中して行つて御話によれば青瑯玕といふものは鑛物中で一番堅いものだ相だが今日は一つ其硬度を試めたいから御愛藏の品を出し給へといふと何をするんだといふから懐中から金剛石入りの硝子切を取出してこれで一寸障はつて見る積りといふと飛んでもないことをいふと早速片付られたことがあつた

柏木氏に品物が這入るとそれが高價に賣れて行くのは不思議な位だつた一例をいふと或入札で畠山如

心齋が青瑯玕の曲玉を三分で落とした夫れを十圓で古錢商の鷺田(先代)に賣つた鷺田が柏木に五圓儲うけて納めると夫れが間もなく二百五十圓で某氏に賣れた先つ其人に徳があつたといふのでせう

柏木は松浦多氣四郎翁をサンヅに悪口し其著はされた撥雲餘興など徹頭徹尾罵倒して居たが何か原因があるんだろうと思つて探ぐつて見ると案の如く松浦が撥雲餘興の表紙に使ひ度いといふので柏木から古寫経を一卷借りて置いたが返へすとき其中から數寸計り切り取つて返へした然し柏木も柏木だから貸すときに其經巻を目方に掛けて置いたのだから承知しない到頭松浦から切り取つた分を取り返へした夫れが原因だった。

このような松浦の悪癖は他にも知られる。明治一五・一六(一八八二・八三)年頃に筑前国の好古家江藤正澄(一八三六一—一九一一)宅を訪れた際、座敷の床間に掛けてあつた狩野探幽作「白衣觀音圖」の大幅を借りるかたちで持ち帰つてしまい、明治一九(一八八六)年になって直接返却を訴えるも詭弁をもって言いくるめられ、否応なく承諾させられた事を江藤自らが「八〇狩野探幽ノ白衣觀音ノ大幅ヲ松浦武四郎ニ借り取セラレシ事」として記録している。³¹⁾

何れにしても前述の揉め事などを契機として、明治一〇年頃を境に松浦の歿する明治二一(一八八八)年まで、二人

の交友は途絶えたことは事実のようである。松浦が明治二〇（一八八七）年に遺した「一畳敷」の造営に最も活躍しそうな柏木の名は認められないのである。

その後、柏木は大工棟梁として明治二三（一八九〇）に岩崎彌之助の深川邸日本館、明治二七（一八九四）年には有楽町三井集会場を完成させる一方、後に益田孝（一八四八―一九三八）の所蔵となった『源氏物語絵巻』『沙門地獄草子』『辟邪絵』や高山寺の『鳥獸戯画残欠』『麻布山水図』³²など美術品蒐集家として世に知られていた中で、明治三一（一八九八）年、東京飛鳥山に建築中の渋沢栄一郎からの帰路、踏切において汽車にはねられ急逝したのである。松浦歿後丁度一〇年後のことであった。

三、おわりに

明治初年における好古家を代表する松浦武四郎と柏木貨一郎の交友関係を中心に見てきた。本論では、とりわけ明治前期においてわが国の文化再編と学問世界の構築に尽力した極めて個性豊かな二人の関係の一端を紹介する程度に留まった。ことに柏木については町田久成を補佐し、内務六等属として博物館に勤務していた明治一二（一八七九）年に『社寺什寶保存規約』の草案をまとめるなど中央の文化財行政においても幾多の業績を有しており、ここに記せなかつた数多の関連事項と合わせて稿を改めて明治前期における文化財保護の観点から詳述したいと考えている。

最後に本論をまとめるに際し、以下の諸機関、諸氏からご教示を賜った。記して謝する次第である。（敬称略五十音順）

静嘉堂文庫・静嘉堂文庫美術館・関西大学博物館・埼玉県立文書館・北海道開拓記念館・松浦武四郎記念館

新井浩文・加藤かな子・加藤理香・小室開弘・須藤雄・成澤麻子・芳賀明子・原徳三・平野哲也・深澤太郎・山口卓也・山本命・三浦泰之

註

- (1) 武四郎の蝦夷地関係の著述には『初蝦夷日誌』全一二冊、『再航日誌』全一四冊、『三航蝦夷日誌』全八冊、『蝦夷大概図』(嘉永三(一八五〇)年)、『壺の石(蝦夷地)』(安政元(一八五四)年)、『蝦夷沿革図』、『後方羊蹄於路志』、『於幾能以志』(安政二(一八五五)年)、『箱館往来』(安政三(一八五六)年)、『蝦夷葉那誌』、『新選未和留辺志』(安政四(一八五七)年)、『壺の石(北蝦夷地)』(安政五(一八五八)年)、『按西・按東・按北属従録』全三三冊、『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』全二三冊、『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』全二六冊、『東西蝦夷山川地理取調日誌』全二八冊、『蝦夷漫画』、『蝦夷地名奈留辺志』(安政六(一八五九)年)、『北蝦夷余誌』、『蝦夷閱境山川地理取調大概図』(万延元(一八六〇)年)、『後方羊蹄日誌』、『石狩日誌』、『久摺日誌』、『十勝日誌』(文久元(一八六一)年)、『夕張日誌』(文久二(一八六二)年)、『納沙布日誌』、『知床日誌』、『手塩日誌』(文久三(一八六三)年)、『鴨厓頼先生一日百詩』、『新板蝦夷土産道中寿五六』、『新板箱館道中名所寿五六』(元治元(一八六四)年)、『西蝦夷日誌初編』、『同二編』、『東蝦夷日誌初編』、『同二編』(慶応元(一八六五)年)、『蝦夷誌』復刻、『北海道国郡図』、『北海道国郡略図』、『千島一覽扇面』、『西蝦夷日誌三編』、『東蝦夷日誌三編』、『東蝦夷日記三編』、『同四編』(明治二(一八六九)年)、『蝦夷年代記』、『千島一覽』、『西蝦夷日誌四編』、『東蝦夷日誌五編』(明治三(一八七〇)年)、『西蝦夷日誌五編』、『東蝦夷日誌六編』(明治四(一八七一年)年)、『西蝦夷日誌六編』(明治五(一八七二年)年)、『東蝦夷日誌七編』(明治六(一八七三年)年)、『東蝦夷日誌八編』(明治一一(一八七八)年)など

が知られている。

(2) 武四郎は、アイヌの立場に立つて場所請負制度の悪習を排斥すべく蝦夷地から松前藩を転封し、奸商の請負を配し、蝦夷地を諸侯に分割すべく奔走したが、商人達は武四郎の意見が通らぬよう長官に賄賂を贈り武四郎を孤立に追いやった。その苦悩する状況は武四郎が画家田崎草雲(一八一五―一八九八)に宛てた書簡(前略)北海道開拓も何分例之松前藩は請負人と長官へ賄賂相遣候島判官と僕の証言有仕候より如何ニもむつかしく候依而近日辞表さし出候可申候(後略)〔明治三年月不詳六日付書簡〕に残っている。

(3) 山本命 二〇二二 「武四郎の古物収集」『博物館における人文資料形成史の研究―静嘉堂文庫所蔵松浦武四郎旧蔵資料の研究と公開―』(本科研)第二回研究会資料によると、松浦武四郎記念館が所蔵する『古鈴図』一巻の巻末には、「右古鈴一巻 本居宣長宅遊 駄路七写鈴看 四五百森東 六有齋主人ヨリ備之写 天保三年六月中旬写 附録二鈴 松浦 弘 写」と記されており、天保三(一八三二)年一五歳の武四郎が国学者本居宣長(一七三〇―一八〇一)が蒐集した鈴の図を、四五百森東に住む六有齋(松坂の豪商長谷川家の八代目で蔵書家の元貞(一七九六―一八五八)から借りて写し、さらに二図を加えている。また、同年伊勢国射和村(松坂市射和町)の延命寺で、京都の本草家山本亡羊(一七七八―一八五九)が主催した八月の物産会に、武四郎が学んだ私塾の師である津藩の儒学者平松楽斎(一七九二―一八五二)が貝の化石を出品するとともに、一五歳の武四郎が「紅毛銭 二種」を出品している。さらに松浦武四郎記念館所蔵資料には、同年武四郎が購入した品物の請求書などが残されている。それによると書籍や砂糖、骨董品を買い込み、天保三年の暮れに支払いに困りはて、師の平松楽斎が代々大切にしていた火事頭巾を持ちだして、道具屋へ売る事件を起こすなど強い物への執着と行動を見せている。

(4) 一畳敷は、明治一九(一八八六)年に松浦武四郎が東京神田五軒町(自宅)に作った書斎。翌年には一畳敷を構成

する部材の由来を記した『木片勸進』を出版。明治二二（一八八八）年、松浦武四郎逝去後の明治四一（一九〇八）年一疊敷は解体され、麻布区飯倉町徳川頼倫邸に移築される。南葵文庫の裏庭に武四郎関係の資料を展示する記念館とともに再建される。大正二二（一九二三）年の関東大震災で被災した東京帝大図書館に南葵文庫を寄進し、南葵文庫は解体。大正二三（一九二四）年移転先である代々木字上原の徳川頼倫邸へ解体されずに移築され、翌年母屋「高風居」が造られる。昭和一一（一九三六）年一疊敷は三鷹にある日産財閥番頭山田敬亮（一八八一—一九四四）が造った別荘「泰山荘」に売却・移築される。昭和一五（一九四〇）年には中島飛行機会社社長中島知久平（一八八四—一九四九）に泰山荘を売却。昭和二五（一九五〇）年泰山荘を含む旧中島三鷹研究所跡地の大部が新設された国際基督教大学に売却され現在に至る。

ヘンリー・スミス 一九九三 『泰山荘 松浦武四郎一疊敷の世界』 国際基督教大学湯浅八郎記念館

(5) 北海道開拓記念館 二〇〇四 第五八回特別展『松浦武四郎時代と人びと』 北海道開拓記念館

(6) 三浦泰之 二〇一一 『武蔵国『好古家』根岸武香と松浦武四郎』 『松浦武四郎研究序説—幕末明治期における知識人ネットワークの諸相—』 研究代表者笹木義友 北海道出版企画センター

(7) 山本命 二〇一一 『渋団扇帖—松浦武四郎が集めたサイン帳—』 『松浦武四郎研究序説—幕末明治期における知識人ネットワークの諸相—』 研究代表者笹木義友 北海道出版企画センター

(8) 大川三雄 一九九四 『工匠・柏木貨一郎の経歴とその史的評価について』 『日本建築史学会計画系論文集』 第四五九号

(9) 鈴木邦夫 一九九八 『鈍翁コレクションのアルケオロジー』 『鈍翁の眼 益田鈍翁の美の世界』 財団法人五島美術館

- (10) 山口昌男 一九九九 「日本近代における経営者と美術コレクター——益田孝と柏木貨一郎——」 『札幌大学化学部紀要』三 札幌大学
- (11) 東京国立博物館 一九七三 『東京国立博物館百年史 資料編』 東京国立博物館 五七四—六〇四頁
- (12) 山口卓也 二〇一〇 「二. 柏木政矩の『石器寫眞』」 『関西大学博物館本山彦一蒐集資料目録』 関西大学博物館 一〇一—一二三頁
- (13) 木下直之 一九九七 「大学南校物産会について」 『学問のアルケオロジ』 東京大学 八六一—一〇五頁
- (14) 重田正夫 二〇一一 「幕末明治期『好古家』たちのネットワーク」 『埼玉の文化財』 第五一号 埼玉県文化財保護協会 一五頁
- (15) 東京国立博物館 一九七三 『東京国立博物館百年史 資料編』 東京国立博物館 一五〇—一六〇頁
- (16) 註15文献一七二—一七三頁
- (17) 金井塚良一 一九八六 『吉見の百穴—北武蔵の横穴墓と古代氏族—』 教育社 二七一—三二頁
- (18) 宮瀧交二 二〇〇四 「大里町青山・根岸家の『蒐古社』について—埼玉県博物館発達史の研究・I—」 『埼玉県立博物館紀要』 二九 埼玉県立博物館
- (19) 埼玉県立文書館 収蔵資料検索システムの「文書群概要」によると、根岸家文書は「大きく三つの文書群から構成される。第一は、甲山村の名主・戸長役場文書群。一部は旗本大久保氏知行所分のみであり、また元禄年間に分村した箕輪村の名主文書も一部含む。年貢関係・戸口関係がやや多い。第二は、根岸家の家文書群で、商業関係や土地経営関係が中心である。第三は、幕末に新徴組へ参加した根岸友山氏と、県会議長・貴族院議員等を勤めた根岸武香氏の個人文書群である。」とのことである (http://www.i-repository.net/infolib/meta_pub/G0000069GATYOU)

から同文書群を検索。引用部は根岸家文書の「内容情報」に拠る。最終確認日：二〇一二年一月三〇日。本論で引用しているのは第三の文書群の一部である。

同文書群は、昭和初年の埼玉県史編さん時に一部が引用された。埼玉大学の歴史学研究室への寄託を経て、昭和三六年二月二七日に埼玉県立図書館へ寄託（埼玉県立図書館『武蔵国大里郡甲山村 根岸家文書目録・近世史料所在調査報告二』 昭和四二年）、現在は埼玉県立文書館寄託資料となっている（埼玉県立文書館『要覧』第三〇号 平成二四年）。なお、根岸武香旧蔵の『撥雲餘興』は現在、青山文庫の一部として、国立国会図書館が収蔵している。

根岸家文書は、根岸家の個人ネットワークのあり方を示すだけでなく、当時の郷土史研究の結果が国家事業としての博覧会等の出品に影響を与えていたことを示す貴重な史料であるといえるのではないだろうか。

(20) 三浦泰之 二〇一〇 「埼玉県立文書館所蔵根岸武香関係文書にある松浦武四郎関係資料」 『松浦武四郎研究会会報』 第五九号

(21) 柴田常恵 「断簡遺墨」(「雑筆六則」のうち) 『東京人類学会雑誌』 第二〇七号 一九〇三年

(22) 翻刻は三浦泰之氏による。

(23) 内川隆志・村松洋介 二〇一一 「静嘉堂文庫所蔵 松浦武四郎旧蔵資料の人文学的研究(古墳時代金属器編)」 『國學院大學考古学資料館紀要』 第二八輯 國學院大學学術資料館考古学資料館部門 五〇―五一頁

(24) 吉田武三 一九六四 『拾遺松浦武四郎』 三省堂 一三一―一四頁

(25) 翻刻は三浦泰之氏による。

(26) 註23文献四四頁

(27) 車崎正彦 二〇〇二 「鍬形石」 『日本考古学事典』 三省堂 二四五頁

- (28) 文化庁福尾正彦氏のご教示による
- (29) 山口昌男 一九九九「日本近代における経営者と美術コレクションの成立―益田孝と柏木貨一郎―」『札幌大学文化学部紀要』三 札幌大学 三八頁
- (30) 福田寒林上人 一九二二「會員談叢」『集古』第三卷 集古會 二五一―二五二頁
- (31) 三浦泰之・山本命 二〇一二「筑前国『好古家』江藤正澄と松浦武四郎―江藤正澄『遺憾録』を中心に―」『北海道開拓記念館研究紀要』第四〇号 北海道開拓記念館 二七二(二九)―二七〇(三一)頁
- (32) 柏木貨一郎旧蔵の『麻布山水図』は現在九州国立博物館に所蔵されている。「衆議院会議録情報 第一七二回国会 決算行政監視委員会第二分科会 第一号」(平成二二年四月二〇日) <http://kokkai.ndl.go.jp/SENTAKU/syugin/171/0042/17104200042001a.html> (最終確認:二〇一二年一月一日)
- (33) 埼玉県立文書館に寄託されている小室家文書の内山書簡の明治一一年一月二九日付書簡(小室家一四〇(一))には、「柏木探古子義御尋」として、柏木の経歴が記されている。その中に「方今松浦武四郎(素開拓使判官、当時非役ナリ)を継タル本州第一之好古家ニ可有之(鑑識トいへ畜「蓄」蔵トいへ)」とあり、当時の柏木への評価が垣間見える。芳賀明子 二〇一二「史料紹介」『好古家』の書簡集『内山手簡』―内山作信と小室元長との交流―」埼玉県立文書館『文書館紀要』第二五号 四六―四七頁 参照(本文の引用は上記論文に拠る)。
- 同論文によると、この『内山書簡』は、「横見郡久米田村(吉見町)の「好古家」内山作信が、比企郡番匠村(ときがわ町)の小室元長に宛てた書簡集」である。受取人の小室元長は、「小室家五代元長(一八二二―八五、号誠蘆・工村・笠山)は、晩年、大里郡甲山の根岸武香らと交流を持ち、郷土史研究に深く傾注していた。」人物である(新井浩文 一九八八「小室家文書所収の中世文書―工村々舎叢書』所収「内山氏古文書写」について―」埼玉県立

文書館『文書館紀要』第一一号 七頁。

本科研ではまた、この小室家文書を基にネットワークの検討を行っている。その内容は別稿とする。